



始



持100
98

目次

(1)	次	目
一	魔法の樽	……(ビヤ樽に入れた人早變りの術)……
二	不思議の靴	……(袋入の少女靴内に消ゆる術)……
三	水中の家鴨	……(盪の中に水を入れ家鴨出る術)……
四	鳳閣	……(密閉中の大籠に人を投込む術)……
五	大洲	……(世界各国人出現せしむる術)……
六	美人を刺殺し蘇生せしむる術	……
七	鬼火	……(水中に妖火燃ゆるの術)……



- 八 昔嘶舌切雀……(寶の籠葛とお化の葛籠)……………
- 九 浮れ太鼓……(手を觸れず太鼓の鳴る術)……………
- 十 變化の鐘……(自然に鐘が鳴り出す術)……………
- 十一 妖魔の聲……(各種の物體が奇聲を發す)……………

——目次終——

世界手品と魔術

緒言

1 術 究 と 品 手

魔術は直覺的に、智能を啓發する娛樂中の、最も趣味深き遊戯である、
 觀者は其原理を觀破せんと、推究するが爲めに、勢ひ思考力を増し、其
 知識を研ぎ、術者も亦た、演藝に際し喝采と歡迎を博せんが爲めに、腦
 力の許す限りは考案に考案を重ね、物理、化學、電氣其他の諸科學に涉
 り、諸書を獵り、得んと欲する處は、魔術にありと雖、識らず／＼の中
 に發明力を膨大ならしめ、世界に屈指の大發明家となつて、世を益した

人もある、本書は爰に見る處あり、編出の魔術は、極めて嶄新奇抜にして妙興深く、而して其理と材だに知らば、容易く人の施術すべき、種類を選び、編纂の方法は、兒童の思考力を養成の目的にて、藝題と原理と施術を各別にしたのである、看客これこれに諒せ。

「藝 題」

機械應用之部

一 魔法の樽

「リナルスリーバルレル」

舞臺正面中央に、高さ三尺程の四脚の臺を持出し、傍に大なる一個のビヤ樽を置き、術者は、徐々舞臺に現れ、観客に對し、演藝の説明をなすべし

演 藝 説 明

「爰に演じまする、魔術は、演題を魔法の樽と名づけましたが、元と、

術 魔 と 品 手

此魔術は、佛蘭
 西の大魔術博士
 ルツボン氏が發
 明致された、「ソ
 ヲルスリーバル
 レル」と申す、
 世界各國至る處
 で、大喝采を博
 した魔術であり



術 魔 と 品 手

ます、偕て魔術の徑路
 を簡短に申上ますれば
 舞臺正面に据置ました
 此ビヤ樽、決して材や
 装置はムいません。
 (此時助手は、滑稽的
 の口調で、モシ〜
 と術者を呼びよ
 助手「先生………獨り決め



で、此樽に材装置がないと仰やつても無効です、訖度樽の底に穴が空であるのでせふ」(と故意と揶揄ふと、術者は笑ひながら)

術「成程、其疑ひも道理……然らば、御



観客の中から、誰何でも、爰へお上り下され、樽の中は勿論、外側から總て御検査を願ひます」

(何人でも構はず舞臺へ上げ樽の検査を行はしめて、然る後ち)

術「偕て諸君の眼前にて、斯く検めますれば、豈夫お胡亂やお疑ひはム
いますまい、愈々これより魔術に取掛ります」ト

樂舎より一名の滑稽姿に扮した巨漢を呼出し、観客に紹介した後ち、
其巨漢を、術者及び、立會の観客等をして、樽の中に入れて終ひ

「偕て御覧の如く、ビヤ樽内に巨漢は這入りましたが、切望只今蓋を致し
ますから、嚴重に御封印を願ひます」ト

〔大勢して樽の蓋をして、螺旋鉸で嚴しく止めて終ひ、樽を四脚の臺の上に乗せ、術者は、細い棒を持つて、樽の載せある臺の下から、樽の周圍やらを、叩き廻つて聊も脱出の箇處なきを示して〕

術「斯くまで充分に檢めますれば、イザこれより魔術を行ひます」ト

〔樽の位置から五六歩隔たり、玩弄短銃を差向け、火蓋を切る、パチン

——〕

術「サア、樽の中を檢めて頂きます」ト

〔立會觀客や助手等に手助はせ樽の蓋の螺旋鉸を抜き取り、樽蓋を除けば、先に這入つた、巨漢の影もなく、窈窕たる美人が現れ出づるの術

であります〕

〔演術方法は原理材料の部に詳説〕

二 不思議の靴

「マーベラルトランケ」

舞臺中央に、カーテンを垂しある大なる方形の、籠の如き物を据ゑ置き傍に大形の旅行函靴を置き、術者舞臺に現れ、藝題を説明すべし

演 藝 説 明

「前回に演じましたる、魔法の樽と、原理に於ましては、殆と同じ様な

處ところがありまするが、これは前回のよりは、餘程奇技な放れ業で、外國の魔術士も、此不思議のトランクばかりは、施術する人は實に、指を屈かどて敷へる程しかありません、然れば不肖の私、仕損しそんじましたなら、幾重いくへにも御容赦を、豫めお願いを致し置おきます……」ト

(靴の方を向いて、蓋を開き、靴の中を観客に見せ)

術「切望お手数ではありますが、観客諸君の中から、三四人程爰へ御出張を願ねがひたいので……」

(観客を舞臺に上げ、靴を検査せしめ、猶、毛織子製の大袋を持出してこれをも充分検査せしむ)

術「観客諸君に御面倒を煩わづらはし、靴及び大囊に、怪あやしむべき處もなく、何の装置もないことだけは、充分御了解になりました、これよりは、本藝ほんげいに着手致ちやくしゆいたします……」ト

(樂舎より盛装したる、小娘を呼出し)

術「只今、呼出しました、此少女を、何人でも御遠慮なく、此大囊の中へお入れ下さい」ト

(何人にも頼んで、少女を囊に容れ其囊の口を固く密封さし印をつけらる)

術「少女、囊に容れたまゝ、爰に備へあります靴の中に、誰何でも構かまひ

「ません、お容れを願ひます」ト

（囊入の少女を靴の内に投げ込み、靴の蓋をして、錠を下し、靴をグル〜と、麻縄にて縛て靴の錠及び縄の結び目にも封印をつ



ける」

術「斯く靴の中に入れました、囊入の少女は怎な事を致しましても、身體が煙とならぬ限りは、外へ出ることは出来ませんが、如何になりませふか、これからが本演藝の主眼たる大魔術を行つて御覧に入れます……」

……ト

（中央に据え置いたカーテン張の籠を、少しく前方に曳き出し、術者は細き竹にて籠の下は勿論、籠の上より周囲まで、叩き且つ拂ひつゝ、特別装置や疑ふべき箇處のあらぬを充分に證據だてる如くに示し、然る後に）

術「観客の諸君よ、私は只今此の靴(少女の義入)を此籠の中に入れてまして

如何なる事を致し

まするか、お目留

められ、變化の模

様に因りては拍手

御喝采を豫めお願

ひ致します」ト

(術者は、助手や
立會人に吩咐て



靴を籠の中にと容れる、此時直に、術者は正面に垂しあるカーテンを
少しく左右に押し開き、僅に面だけを現し」

術「一 二 三」ト

(掛聲をすると共に、面を隠す、と同時に先に袋に入れられ且つ、靴の
中に入れられた少女が、カーテンの間から面を出し

「今日は」ト

(挨拶し、籠のカーテンを押分け、舞臺へ飛出し來るのである、助手は
籠の中より、靴を引摺り出して且つ籠の周囲のカーテンを悉く取除け
改め見て」

助手「借て皆さん……術者は何處へ行きましたかお判りになりますか、又、これなる少女が如何にして囊に入れられ且つ鞆にまで納れられた身を、脱れましたか、總ての疑問は、此不思議のトランクを開きますればお判りになります」ト

(言ひつゝ、錠前の封印や繩の結目等を、再検査を立會人に求めて、徐々に錠を外し、繩を解きて、蓋を開き、囊を取り出して、囊の結び目を改めさせ、囊を解けば、悠々として術者は、囊より現はれる巧妙な魔術である)

「演術方法は、原理材料の部に詳説」

三 水中の家鴨

「ダックインウヲター」

演場の中央に、大なる盥を据え、盥の周囲にある五六杯の荷ひ桶に満々と水を汲み込み置くべし、術者は、一應盥を擡げ、観客に對ひ中の充分見え得る容にして、而して演題の理由を述べたつべし

演題説明

術「原名をダック、イン、ウヲターと申ます然れば、水中の家鴨と譯しましたがこれは大魔術中の大魔術で、眞個に演じますと舞臺一面を、ポンド(池)に變らし、其池の中に多の家鴨を游泳させるのでありますが、

と高く響くと同時に、盥の中なる水上には數多の家鴨、俄に現れ游泳



みますれば、御面倒ながら、御胡亂と思召す方は、切望今一應盥の中を御検査の上、荷ひ桶の水をお入れ下さいます様お願い致します」ト

（再々観客に盥を改めさせ、荷ひ桶の水を盥、充滿に張込まして、術者は盥の位置より、少しく隔たる處に突立ち）
「假りに池と做へた、盥の中には、數多の家鴨は游泳を致させます」ト
（姿勢を正し、短銃一發……パチン——

却々、其様な大袈裟なる魔術は、些度行ひ難ねまするで、小規模に演じて御高覽に供します」ト

（盥を舊の位置に置き）

術「此處に据え置きましたる盥を、假に池と做らへまして、水を張り込



するのが、此藝の終りであります」

「原理方法は材料の部に詳説」

四 鳳 凰 閣

「ストレンヂ、ケージ」

舞臺中央に、方形の大籠を、四脚の程よき臺の上に据え置き、周圍にカ
ーテンを垂らし、術者は籠の前に立つて、例の如く演題を説明すべし

演 題 説 明

「爰に演出致しました、魔術は、米國の奇術士ヘンリー、ウイルソンが、

得意の演藝「ストレンヂケ

ージ」を、種々に改良を加

へ、嶄新な趣向を凝らした

獨特の技術で、鳳凰閣と命

名致しました、就ては例の

如く、魔術を行ふ前に、籠

検めから取掛ります」ト

（籠を臺の上に据えたまゝ

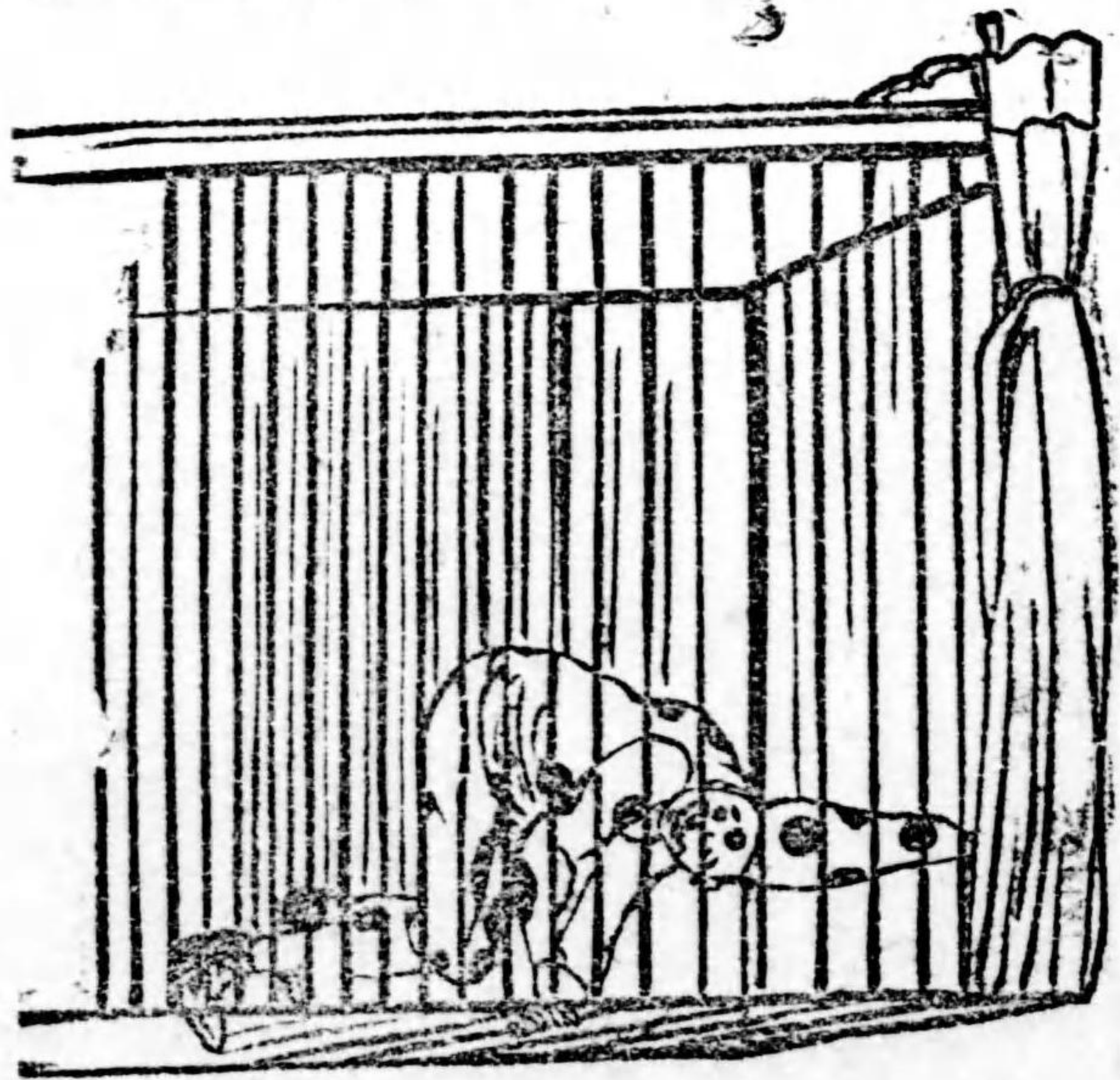
少しく前に曳き出し、カ



カーテンを巻き揚げ、細き竹の棒にて、臺の下を拂ひ、籠の中周囲と充分叩き且つ拂ひ、装置なく何物も潜み居らぬ事を篤と検め、樂舎より一小兒をば拉來らしめ、籠の中に放ち、カーテンは再び舊の如く垂らし、術者は、籠より程よき位置まで放れ、短銃を放つこと例の如く、パチン……と一



發、此響と共に、垂れたる籠の周圍にありました、カーテンは一時にギリ／＼と手を觸れずして、巻き揚ると、兒は既何時の間にか、逃去つて居る其代りに大きな人間が、鳥の真似をして、籠の止り木にブラ下つて口中に含みたる笛は、頻りに禽の鳴音を發して居る、術者は、籠の傍に進み寄り、得々として、籠の扉を開



けば、中なる止り木の鳳凰に擬した助手の人は、飛出し、翱翔まねして樂屋に引込むのが此演藝の終り)

「原理方法は、原理材料の部に詳説」

五 五 大 洲

「インユニバーサル」

演壇中央に角形の四方開きにして大なる籠の如き物を、四脚の臺に据る置き、赤の帛を垂し、これを巻きあげおくべし、術者は盛装して演壇に現れ、観客に一輯し、挨拶済みたる後ち

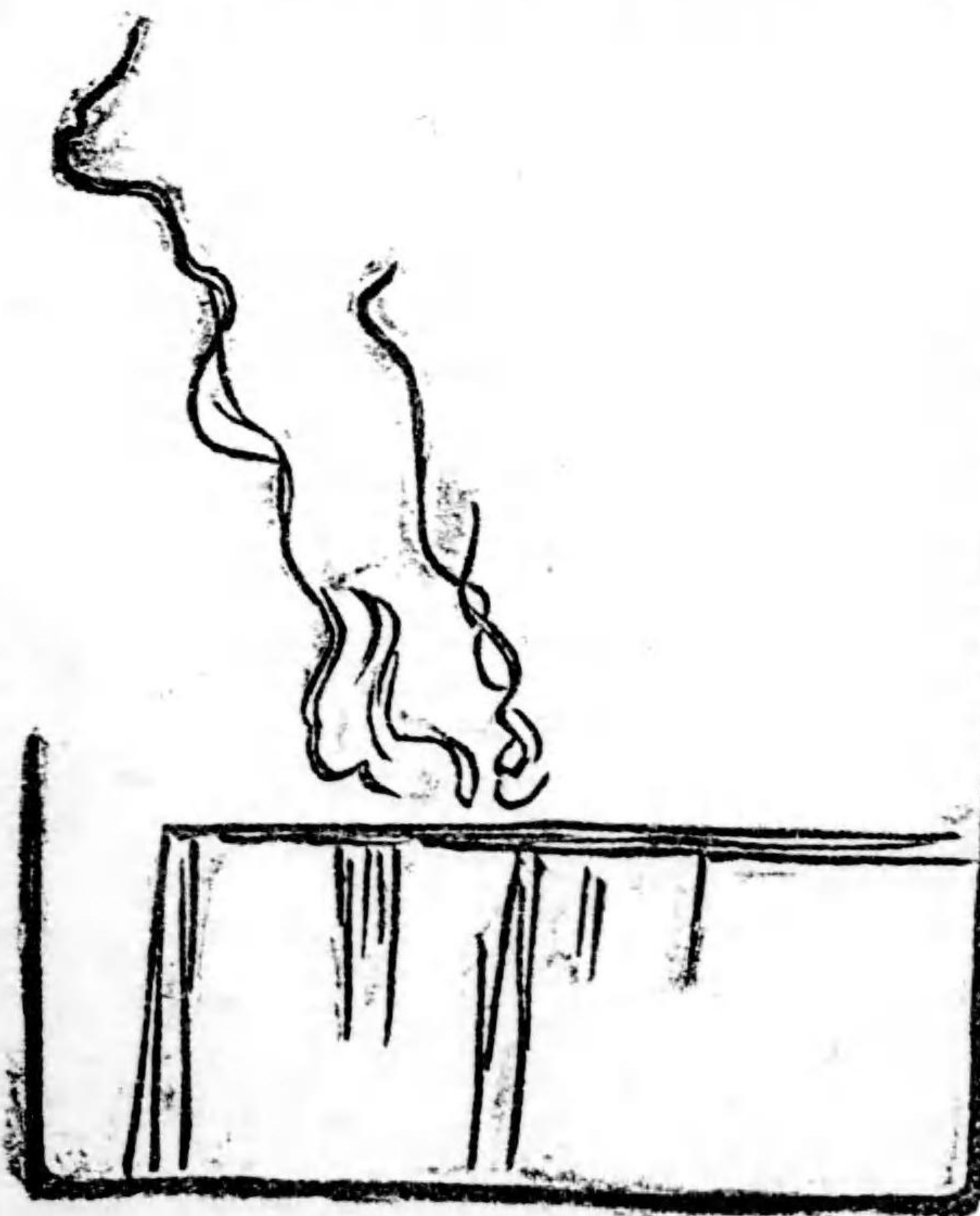
演 題 説 明

「爰に演出の大魔術は名づけて五大洲と申ます、些度、外題が大形過はせぬかと、某人から御心添へがありました、大は小を兼るとか申こともムいませぬ、小さいよりは大きい方が宜敷からうと存じ、猶且、改題を仕りませずして御高覽に供します次第で、併し聊かにても、當魔術が、五



大洲の意味に符合致しましたなら、
アこれより、演藝に取掛りま
すト

（樂舎より一名のアイヌの士
人に扮した、髯むくぢやらの
巨漢を拉し來つて、此士
人を舞臺に立せ、其間に、
術者は、細き竹棒にて、例
に依つて例の如く、籠の四方



相變らず御賜采を願ひ置きます、サ

の扉を開き
赤き帛を巻
きあげ充分
遠くより見



透しに出來得る様にして、猶
内側外側の上下を叩き且つ拂
ひて、全く空籠にして何等の
装置なきことを示し、然る後に、舞臺に
立せ置く、アイヌ士人を、籠の中に押しこ
み、四方の扉を固く閉ざし、巻揚げたる
赤き帛を垂らし、籠の中は全く見えなく
なるを待つて術者は、籠より離るゝ、數
歩、相變らず短銃を、籠に擬して一發バ

チン——、不思議にも響と共に、籠の周圍に垂しある赤き帛は自然に
 卷あがれば
 籠の中には
 土人の影も
 なく、支那人、朝鮮人、
 歐羅巴人、
 亞弗利加人
 等あらゆる



世界各国各種の人間に扮装した人々が踏踏をやりつゝ、籠の扉を開け
 て、演壇に跳り出しつゝ、樂舎に引込むのが此演藝の終り」
 「施術は原材料の部に詳くあり」

六 魔 人

「デビル」

舞臺の中央正面の場所に、低き臺を置き、其上に、五六尺の長形の細く
 編みたる籠(幅と深さは各二尺五寸を超ゆべからず)を据ゑ、而して右の
 方に一個のビヤ樽を置かしめ術者は輕装勇ましき扮装にて、舞臺に立現

れ臺や籠に、何等の仕掛や、疑ふべき胡亂の箇處なきを、観客に充分改め示し、然る後ち演題の趣旨を述ぶるのである

演 題 説 明

術「デビル」とは悪魔と云ふ意味の洋語で、それを其まゝ、演題に命名しましたるは、術者即ち私は、演藝中は全然悪魔になつた意志で、人間業を放れた、不可思議な而して殺伐な、演藝で、少女を虐殺し又直に、これを蘇生せしめるなど、恰も生殺與奪の權能を、術者の手中に在る如き一見戦慄すべき魔術であります」ト
概畧の演藝の筋を述べ終ると直に、樂舎より一人の盛装したる、少女

を呼び來りて術者

は、少女の兩眼を

白き布帛にて、目

隠を行ひ

術「汝を只今何々の

答により、慘り殺に

致すべければ、覺悟

を致すべし」ト

(滑稽交りに死の宣



告を與へ、少女が泣き且つ詫びるも聞容れずして、少女の兩手を縛りて、舞臺正面に据ゑ置たる籠の中に、無理から推し込め、而して、術者は此時より、魔人になつた如くに、凡ての舉動容姿をして、長き劍を引抜けば、夏尙ほ寒き氷の刃、見るから物凄、二三度舞臺に備つけの或物體を、試し斬り或は試し突を行ひ、白刃の鋭くして仕掛なきを示して、術者は一層、森嚴なる態度となつて

「エー、ストロー」

(と氣合掛聲をなし、極めて無慘に、籠の前面といはず側面といはず、所撰ばず突き刺すので、籠の中よりは頻りに、苦悶と悲鳴の聲があが

り紅の如き血汐は泉の湧き出たらん如くに、迸り出で、兎角すること二三分乍ち、籠中苦悶の聲はピツタリ止む術者は、莞爾笑つて、觀客に對ひ)

術「觀客諸君、只今籠の中に入れました少女の生命は、慘酷非道なる私の、白刃の下に既に絶れ、彼の女の肉體は蜂の巢の如くに、なつて居るであらふと思召しでういませふが、私は此演藝中は、魔人でありませぬ、デビルです、生殺與奪は私の手中に在ります、それゆゑ、籠中にて慘殺致した、少女に再び生命を與へ、爰へ呼び出して再び諸君に御目通御挨拶を致させます」ト

（言ひな

がら、

ヅカッ

カと、

右の方

に据え

置ける

ビヤ樽

の傍に



進み、樽を轉がし全く空き樽であることを示し、再び舊の位置に復し蓋をなし終ると共に、術者は籠と樽の中央の位置にイみて」

「エー スト」

（ト再び掛聲して、短銃一發、バチン——此響で、ビヤ樽はバラくと破壊され中より最前、籠の中に推入れられ殺された、少女が現れ、觀客席に挨拶をする）術者は

術「御覽の如く身體鵜の毛で突た、傷もムいません、偕て籠の中は一應如何なりましたか檢ためます……」ト

（籠を臺より卸し、蓋を除き逆倒にして檢むるも、元より居るべき筈な

き少女、影も容も消え失せて居るのが、此魔人の演藝の終りである」
 「施術方法は原理材料の部に詳説」

七 鬼 火

「イグニス ファチユス」

演壇中央に立派やかな、三脚なる卓を据え置き、其上に、大きやかな硝子製の大形の鉢を置き、傍に二升入程の水差瓶を備え、而して術者は徐々、演壇に現れ、藝題説明にかゝるのである

演 藝 説 明

○「此鬼火と申まする演藝は、大きくなると、なか／＼大仕掛な極めて美事な、魔術で且つ物凄いのであります、然れば、イグニスファチユスの名がつかまりましたのであるが、私が只今、爰に演じますは極めて小規模にして、何人にも容易く演じられるのであります」ト

（挨拶が済んだなら、卓の傍に進み寄り、据え置たる、硝子鉢を卸し、充分仕掛なきを観客に検査を乞ひ、然る後に再び卓上に据え、水差瓶を手に取りて、硝子鉢に水を注ぎ入るれば、水が鉢に満々になると、不思議や、炎々と水中に火が燃え上るのが此演藝の終り）

「施術方法は原理材料の部に詳説」

八 昔 噺 舌 切 雀

「エンシエントストーリーヲアスバロー」

演藝場中央に、一閑張りにて製したる美しき把のついた、葛籠の如き蓋つきの筐を飾り置くべし、而して、術者は西洋風にて、日本風にても孰れにしても可なれども、成べく古代の服装にて舞臺へ立現れ、演藝の趣向と順序を述べるのである

演 藝 説 明

○此演藝は極めて趣味のある、意志で歐米にて有名の魔術士が致します、其魔術を参考として昔噺 舌切雀と名づけましたる、其意味を簡

短に申上ますれば、昔噺にありまする彼の、慾の深い老婆が、老爺さんが秘藏を致す一羽の雀が糊を齧めたとかで、雀の舌を切りて、籠の外へ放ちました跡で、老爺が戻つて其事を聞いて、大層雀を不憫がつて雀の行衛を探しに、山へ探しに参り、雀から軽い葛籠を貰つて歸り、開て見れば澤山の寶物が這入つて居つた、これを羨やましがつて、慾深婆が、雀の居る其山に参り、猶且葛籠は貰つて來たがこれは重い葛籠、開けて見れば三ツ目小僧大入道様な妖怪化物が現れたと、剛慾を戒めるお伽噺があります、此お噺に似たお噺が西洋にもムいます、即ち、英國の文豪シエクスピヤの作、人肉質入裁判と申す脚本の中にあります、美人

ポーシアを、戀ひ慕ひ求婚の申込みを致す、紳士紳商數多き中にも、アラゴン公、モロッコ公の二貴族と伊太利ヴェニス商人バツサニオの三人が、最も熱心で、頻りにポーシアに婚姻を迫りますので、美人ポーシヤ一個の肉體で三人に嫁ぐことは出来ませんので、三人の心の醜美賢愚を試めさふと一策を案じ、金の筐、銀の筐、鉛の筐の三個を作り、三人の求婚者の面前に差出し、此筐の中



には妾の肖像納めあり、肖像納めある筐をお取り下された方に、妾は婚姻致しますと申された、三人の求婚者は、成程ポーシヤの言ふのは道理である、一人の身體で三人の心を満足せしめる事は出来ない、斯ふして勝敗を決した上ならば、落第した二人誰になるかは判らぬが、諦めもつくと、言合した様に三人は爾思つて、これを承諾し、偕て、三個の筐の中孰れにしやふかと、三人は暫く思案の末モロッコ公とアラゴン公の兩人は、性來甚だ慾深の人故、金銀の筐を争つて、撰び取り、バツサニオは、精神の潔いな温順い性れの人故、跡で悠々と鉛の筐を撰び、開けて見ると思ひきや、金銀の美しき筐には、美人の肖像どころではなく、欄

體や其他見るも胸の悪くなる物が入れてあり、パツサニオの擇んだ外觀の醜い鉛の筐の中に、美しきポーションヤの肖像が納めてありました……とか申す昔噺がムいます、そこで私は、西洋の昔噺と、日本のお伽噺を折衷して、演藝に脚色しました」ト

（長々しき口上を述べ、舞臺に据置し葛籠を持出し、蓋を除き、観客に全く空にして且つ、装置なきを示して、四脚の臺の上に載せ）

術「諸君、只今お検めになりました葛籠は一個であります、重きも輕きも自由になります、まづ最初は重き葛籠に致しますれば、何卒観客諸君の中にて、誰何にても膂力の御自慢の方は御遠慮なく、此葛籠を持ち

上げて下さいまし」ト

（観客に請ふのである、好奇心に驅られて観客中の或者が舞臺に上り來らば、術者は其人に向ひ）

術「貴君は此葛籠の重量を幾百貫あると思召す」

（と頭から途方もない問ひ振をするので誰でも莫迦しく思ふ、鳥渡見た處では甚麼に重く見ても一二貫目は超えぬのに幾百貫——とは餘りに大仰らしいので、大抵は答も出來ず笑つて居る、術者は至つて眞面目の態度と口調を保つて）

術「何故答えて下さらんです、ア、判つた定めし輕いと思召してか……

……これは斯見えましても、確かに千貫目以上ムいます、虚と思召すな
ら、御面倒ながら、お試しを願ひます』

(斯く)

言ふ

ので

観客

は冗



戯と思ひながらも、始め鳥渡持上げかけて、其重さに愕き兩手を掛け
果ては兩脚を踏張り、渾身の力を込めて持揚げんと焦れども、葛籠は恰

も盤石の如く釘付にでもなつたる様に、ピリとも動かない。此時魔術

者は

術「サア如何です、重いでせふ到底もお一人やお二人三人四人乃至十人
の力でも、揚ることは不可能せぬ、虚言や法螺と思召めすなら、御遠慮
なく、何十人にてても舞臺へお上り下されて持あげて下さい」ト

(観客席に揚言致しまするので、時に十数人の観客が上つて来て、葛籠
を持あげんと力を極めますが、猶且五分の隙さへ持上りませんのを、
術者は冷かに見て笑ひながら観客席に再び向ひ)

術「怎れ程、御登場なされた數多のお客様がお力を振ひましても、所詮

動くものでは無いませぬ、恐らく常陸山風梅ヶ谷の如き人物が數十人かゝりましたら如何でせふか……然し、斯く云ふ私に限りては、玄妙不可解の大魔力がありまするに因り、斯様な、重量葛籠も容易く、僅に一本の指を以て、持ち揚げます』ト

（観客立會人を、葛籠から退かせ、術者は）

『エー スト——』

（と長く引く大聲の氣合掛聲をして、再び葛籠の傍に進み寄り、人差し指一本を葛籠の把手に掛け、軽々しく持揚げた後ち）

術「お客さん、私の一令の下に斯く軽くなりました、モ一怎んな、お子

供衆でも容易に揚げる事が出来ます、サア揚げて御覽なさい……」
 （ト再び持揚げさせれば、不思議や葛籠は僅に五六斤程の最も軽い葛籠と變り一同を愕かせるのが、此演藝の終り）
 『施術方法は原理想材料中に詳説』

九 浮れ太鼓

「クライメイト、ドラム」

舞臺程よき處に、大なる太鼓を紐にて吊し置くべし、術者は樂師風の服装に打扮して演壇に現れ

演題藝術の説明

術「此魔術は、佛國式でやると魔の太鼓と名づけ、演藝は何となく凄愴陰氣にゆくのですが私が演ずるは、極々陽氣に賑かに花々しく行ひますデ演題も、浮れ太鼓と申ました、これは別段六ヶ敷魔術ではありません爰に持出した、二の撥、これを太鼓の傍に置きます、まづ、太鼓及び二本の撥充分のお目を留められて御一覽を願います」ト

(撥を袋に入れて、太鼓の下に置くと、太鼓は、手を觸れずして、術者が)

術「陽氣にやらかせく」ト

(號令すれば、角力甚句の如な打ち方を太鼓がする、又術者が)

「止め——」ト

(停止を命すれば、鳴り止んで、再び命令すれば打ち、種々に鳴り渡り斯して術者は止れり號令で、太鼓の音を止め、撥を納れた袋を取り上げ、袋を開けば、いつしか二本の撥は失なつて居る、これが演藝の終局である)

「施術方法は原理材料中に詳説」

一〇 變化の鐘

『ベル、ラフ、トランスフォーム』

演場中央に、吊鐘を、程よく二筋の絹糸紐にて結びつけ、高く吊しあげ凡ての準備、成るを待つて、術者は演壇に現はれ、観客に軽く敬禮して説明にかゝる

演 題 説 明

術「爰に演じまする、變化の鐘は、殆ど前回に演じました、浮れ太鼓と同じ様でムいりますが、聊か前回と異ります特色は、能く爰に吊しありまする鐘は、人の吉凶禍福を豫知し之を豫言致します、尤も此鐘、尋常一

様平凡通例な……ト

（少しく可笑味ある滑稽態度と口調を用ひ）

術「鐘とは事異り、抑も今を去る事二千幾百年の昔、即ちビーフオアクリスト紀元前千幾年のその月、ナイル河の河底から揚つた不思議の鐘能く人の語を解し、又人の發音する如に凡て何事をも語ります」ト

（口から出放題な法螺と虚言を列べちらし）

術「偕てこれより、私が鐘に對つて種々なる質問を試みますが、豈夫人語を解し人の如く發音すると申しても、鐘が人の舌端で喋舌する様な發音は出來べき理由はありません、譬へば私が、（爾であるか）と質問す

る場合に、鐘は質問に就て、爾であると答へる場合は、三ツ續打をする
 爾でないとき答へる時には四ツ打つのであります、而して其他其鳴響く發
 音が少々にても、人の語るに似たる處がありましたら、拍手御喝采を願
 ひます」ト

(豫め演藝の筋を述べ而して、観客の中より年若き男子一人を舞臺へ上
 げ、術者は、鐘に對つて物言ふ如く)

術「コレ〜鐘よ今爰に登場を願つた、お客様は、女であるが、果して
 爾う思ふたなら、豫定の如く三ツ打續けをしる、若し違ふと思ひ爾でな
 ければ四ツ續け打にしろ」ト

(命令すれば、鐘は手を觸れずして、撞木は揺動だして、カン カン
 カンと四ツ續け打つ、術者は笑ひながら)

術「判つたか、感心々々、爾でないとき合圖の打方をする處をみると男だ
 と言ふのだな、いかにも男だ……併し此お方が、幾歲だか、知つて居
 るか、尙し知つて居るならば、大きく一ツ、鳴れ〜」

(命令を術者がする言下に、鐘は、ブーンと音高く響く)

術「知つて居ると挨拶をしたからは、幾歲だか當て、見ろツ、併し一定
 の申つけをする、澤山の數を鳴り響かれても騒々しいから一を十歲とし
 て、二ツ打てば二十歲、三ツ打てば三十歲開して此順で一打を十歲づゝ

増殖し、端数はまけてやるから、十臺だか二十臺だかそれとも四十五十乃至六十臺の御老人か、打つて見ろ」

（此吩咐を恰も鐘は人語を聞分る如く、ガン、ガンと二打をする、術者は其観客に對ひ）

術「如何でムいます、二十歳臺でいらつしやいませう」ト

（問へば爾であると観客の答を聞て然る後ちに、種々な打法をさせ、恰も鐘が心あるが如くに演ずるのが、此藝の終り）

「施術方法は原理材料の部に詳説」



一 妖 魔 の 聲

「ボイス、オブ、デビル」

舞臺正面に大なる卓を据ゑ、其上に金屬製のコップ、像型、花瓶其他、陶器類を除き種々な品物を羅列し置き、準備、全く整ひて後ち術者は、藝壇に立ち現れ

演 題 説 明

術「観客の諸君、本魔術は、浮れ太鼓或は變化の鐘と皆な同一の學理を應用したのでありますから、殆ど其演藝も大差はムいませぬ、开して別段、目先の華々しい面白い、趣味のある魔術ではありません、たゞ學理

一方の魔術ゆる聊か學生方の參考にならうかと、術者が特に演ずる次第で、演題が、妖魔の聲だとか、化物の聲だとか申ましても、大した事を致すのではありませぬ、たゞ、御覽の如く舞臺正面に備へつけました、卓上の諸物が、手を觸れずして、奇妙な音聲を發するのであります」

(演藝の筋を演述し了ると共に、演者は一々卓上の物品を、觀席を持つて行つては檢めて貰ひ、舊の位置に据ゑ、悉皆檢め終ると同時に、術者は、チェアを離るゝ十數歩にして、隱袋から短銃を取り出し、一發バチン——、響と共に、一齊に卓上の諸物品が奇妙な唸りを生じ、恰も化物屋敷へでも行つた如くに、花瓶コップ等が、舞臺中空を飛びながら

唸り響くこと、數分術者は

「ストップ——(止れ)の

(號令を下すと同時に、諸物品は舊位置に復し唸りもピツタリ止むこれ此藝の終局)

「方法は原理材料の部に詳説」



原理材料詳解

凡そ魔術を演ずるに大小の區別がある、大魔術は絶対に急即臨時に、座敷では行ふことは不可能せん、怎うしても、特別装置の舞臺と魔術用道具が必要であります、然れば、大魔術用の器具製造から、説明致しませう

一 陷 穿 卓 子 (おとしあなつくる)

陷穿卓には一箇所若くは二箇所の穴を卓の上にくりぬいて穴を空けて

おく、但し遠方より望み見て決して、観客に見破られぬ様に造るべし、此穴の空け様に種々あれど、大概三種あれば足るので、此穴ある爲めに魔術士は随意に或る物品を出没せしめる事が出来るのである、今左に出没すべき其物品に因り穴が相違するゆるる列記して置く

(1) 平 面 穿

卓子の上に直径凡そ一寸五六分乃至三寸餘の圓き孔を穿ち卓上の物品を押し隠し或は抜き取る場合に用ゆ、而して卓子の上には表面板と稱して薄き金屬板を以て卓面に凸凹なき様に、螺釘にて打附け、而して此金屬板にも下と同形の穴をくりぬき押蓋を用ゐて之を塞ぐのであるが、其押

蓋は彈機はじきの蝶番てつがひありて上下うへしたに開閉かいていの出來きる様に裝置し、故ゆゑに上うへより此蓋このふたを壓おさすときは下したに開ひらき、放はなせば直すぐに閉とぢ舊形きうけいに復たする裝置さうちである

(2) 手 腕 陥 穽

これは、卓上たくじやうに、二個所かしょの、平面へいめん穿あなより稍小やせうなる構造こうぞうの穴あなを同おなじ構造こうぞうにて造つくりたゞ相違さうみするは、一方ほうの穴あなのある所ところを壓おせば、一方ほうの穴あなが開あき、中なかに入れてある物ものが、卓ていの中なかより上うへに飛出とびだすべき裝置さうちあるのみが違ちがふ

(3) 動 物 穿

これは兎うさぎ又は鳩はと鶏とり等らを出だすのであるから、成なるべく穴あなは、楕圓形だまんけいに直徑ちよくけい七八寸すん、狭せまき方ほうは五六寸位すんぐらゐ、而しかして押蓋おしふたは正中まんなかより割われた綴合つひりあせ板いたが便べん

利である

二 活 塞 子

眞鍮しんちゆうにて造つくりたる管くだ、直徑ちよくけい凡およそ五六分長ぶながさ凡およそ四五寸すん、其一端そのたんに環狀形わのかたちの物ものを附つけ之これに、螺孔ねらなを穿うち、卓ていの裏側うらがはに接續せつぞくせしむ、又此眞鍮製またこのしんちゆうせいの管くだの中なかに、針金はりがねの棒ぼうあり、厚あつさ凡およそ一分五厘ぶご乃至お二分ぶ其末端そのまつたんに眞鍮製しんちゆうせいの小ちひさき平圓板へいめんはんありて、自在じざいに管くだを上下じやうげせしむ、又螺旋形またらせんけいを爲なしたる眞鍮製しんちゆうせいの發條せんまいありて、平素へいそは平圓板へいめんはんを抑おさへつけて居ゐる、然しかれども、他たに一片ぺんの紐ひもありて平圓板へいめんはんに結むびつけ管くだを通して、環狀形くわんじゆうけいの物ものに鉸留びやうどめをしてある、

小滑車せうくわしやの力ちからをかりて、此組このひもを引く時は平圓板へいまんばんは、發條せんまいの壓迫あつぱくを排はきして上に揚あがるが故ゆゑに、凡てすべの物體ぶつたいを彈はじき上あひる時ときなぞの用ように供きやうするのである
此外このほか特別装置とくべつさうちは、舞臺上ぶたいじやうにも、穿あなを穿うがち仕掛しかけ卓ていぶると同じ構造こうぞうをなしおかねばならぬ

一 魔法の樽

此魔術このまじゆつは、ビヤ樽びやだるの底そこが、殆ど装置はんとんしかけ穿あなの如やうに出入しゆつにが出来る併しかこれは、造り方つくかたがなかく面倒めんどうで、樽たるの中から、バネになつて居る、處ところを指さで押おすと人ひとの出入でいりが出来できるだけ左右さゆうに開ひらき、出でて終しまへば彈力だんりよくで舊もとの如ごとくに穴あな

は閉とちて少しも穴あなのある様やうには見えぬ、樽たるの中なかに入れられた巨漢きよこは、樽たるが臺たいの上うへに載のせられるまでに、樽たるの蓋ふたに螺釘りぢぢなどをして居る間に底そこから脱ぬけて、舞臺ぶたいの平面穿へいめんあなを潜くぐり樂舍がくやに行ゆくのである、然されば、最初さいしゆ術者じゆつしやは樽たるの底そこを舞臺ぶたいの平面穴へいめんあなの上うへに置おき舞臺下ぶたいした即すなはち奈落ならくには替玉かへたまとなるべき美人びじんが待つて居る、底そこから出でた者ものと直すぐ入替いれかつて終しまふのである

二 不思議の靴

此魔術このまじゆつは前まえの樽たると大たいした、相違さうかはありませんが囊ふくろに這入はいりて、出でるだけだけが面倒めんどうです、靴かはんの底そこは、穴あなが自由じゆうに開閉かいへいの出来できる様やうになつて居をります、

鞆は猶且、舞臺の平面穴の装置ある處に置くを要す。術者は囊を檢め、少女を囊の中に入れる、囊は一見普通の如けれど、此囊の縫目は二重綾縫となつて、縫目を推分ければ自由に出られると雖出た處の上下の端を持つて二三度伸縮させると、舊狀になつて、決して縫目の綻びたりすることは、観客には了解ない、而して、少女は、囊入になつて鞆に容れられるとモ一、囊の縫目を綻ばして、身體は出て居り、鞆の蓋をして居る中に、鞆の底の陥穽から舞臺の穴を通して、奈落（舞臺下）を通つて大籠の下に行き、観客立會人や術者助手等が大勢で、空鞆を、錠を下したり、繩絡げなぞして、大騒ぎをやつてる混雜の間に、

籠の底から籠中に這入て終ふのであるが、籠の周圍にはカーテンが垂れて居るので少女の這入つて隅の方に潜んで居るなどは知れべき筈がない兎角、鞆の中、鞆を籠の中に入れるのであるが鞆を持ち運ぶは、言ふまでもなく、樂舎中の者であるから、籠の中に少女の潜伏して居るを認めたらとて、一向差支へないので、其中、術者は籠の中に入り、カンテンを左右に推し顔だけ出して、ワンツースリーで顔を引籠め、鞆の底の穴を開け、鞆に這入り、袋の縫目を開けて、囊を被つて終ふ（囊の口は封印のまゝ）此所作は頗る迅速を要す、何故なれば、術者が顔を引くと同時に少女が顔を出さねばならぬからである。

三 水中の家鴨

これも又穿の働きで、盥の底に平面陷穿が空て居る、盥検めが済んだらば、舞臺仕掛の場所に置き、術者が口上を述べて居る間に奈落(舞臺下)の後見は盥の底の穴へ大なる特製活塞子(此活塞子の中には三羽程の家鴨を詰め)を箆めこみ、愈々盥に水が這入つても決してピストンの箆め方で、水は漏らぬ(多少は漏るが)盥に水が満ちて術者の合圖の短銃の響と共に奈落では、ピストンの紐を強く引けば、ピストンに詰め籠れて居た、家鴨は盥の水面に飛出すのである

四 鳳凰閣

鳳凰閣なぞと大仰な名をつける程の、奇術ではありません、猶且陷穿の作用であります、舞臺にも籠にも無論、陷穿があるので、術者が、一羽の鳩なり鶏なりを、籠の中に投げ込めば、籠の周囲は帛が垂れて居ることゆゑ、籠中は観客席より一向に見えぬ、そこで奈落(舞臺下)の後見人は、籠の後部に黒布が張られて居る、其黒布の間から手を出して籠に入れた鳩なり鶏なりを取除いて終ふこれは籠底の陷穿からだ工合が悪、籠の後面は自由に開閉しても周囲の帛の爲めに、巧みに観客の視線

を避くることが出来る、舞臺によりては、籠底の穿を用ゐずして、後面から鳥と入替りに、助手が籠の中に入り、鳥の眞似をして居る、術者の合圖の銃聲あらば、中より、電氣装置のポイントを押せば、カーテンは自然に巻揚り、術者がさも得意らしく扉を開けるを待て、鳥の替玉男は鳥の飛ぶ眞似して籠より出れば可のである

五 五 大 洲

鳳凰閣は、最初籠に入れるのが鳥類、五大洲はアイヌに扮した人間だけの相違で、施術も仕懸も同じ理屈であるが、たゞ前者は、替玉がたゞ一

人であるが後者は数人であるから、餘程入替る時手早くせぬと、観客に見現はされる虞があるから、餘程機敏に迅速を要す、これは是非とも、背面より出入せねばならねば籠の位置は成べくたけ、舞臺の奥の方を撰ぶべし、カーテン巻上げの如きは、前と異ならず

六 魔 人

此魔術には新舊の二法があります、此奇術の鼻祖はコロネルストデーア氏で、此法に依れば

舞臺正面に大なる陷穿を穿つ凡て前と同じく籠を載せべき、臺の脚と脚

との間に鏡を嵌め上面の板には、一箇の大なる孔を穿ち、籠は籠ゆるに穴を空ることが出来ないから、籠底は蝶番ひにて、自在に開け閉ちが出来る構造にすること

少女を籠中に入りたる間は、底は開いて籠の内部の兩側に密着して、少女が、臺の下へ投げる（鏡が張つてある故、外觀は四脚の見透臺の如ければ）も少しも観客に氣がつかない、其間に舞臺の穴を抜けて、奈落より樂舎に行く奈落（舞臺下）の後見人は籠底を原形のまゝに復し術者は空籠を無暗矢鱈に突く如くして然らず籠の側面に、赤色の液汁を含ませある海綿が隠してある其處を狙つて突くので、恰ら肉體を突き刺す如に、

遠くからは見え、赤汁は血液の様に流れ出る、此様事をして居る間に魔法の樽の如く、底にピットフアール（穴）の仕掛あるビヤ樽の底へ、舞臺の穴蓋をとつて少女は潜り込んで、合圖の短銃の響を待つ、一發の響と共に、樽中の少女は、樽の内側面の栓を引抜けば、樽はバラ／＼になる様になつて居る

七 鬼 火

硝子製の鉢中に、酒精と樟腦にて製した混合液を鉢の中に入れ置き、水を注ぎ入れる時密と密に発見られぬ様に、ポツタシユムと云ふ薬品を少

許、鉢の中に投入すれば、乍ち、忽然として、水中に火を發す
「原理」アルコールは水より輕ければ不混合であり且つ樟腦も燃焼物に
して水面に浮ぶものである、ポツタシユムは、水と接觸すれば、直に
分解して、發火して、アルコール樟腦に火が移り、炎々と陰火の如き
青い火が燃える、頗る簡易の奇術である

八

昔 噺 舌 切 雀

葛籠の底を鐵板にて張り、柱脚の上の部分も亦鐵板にて造り、其中に強
き電磁器を含ませ柱脚は鐵板と密接ならしめ、針金にて舞臺の下なる後

見人の隠れ居る處へ其流通機關を備へ置を要す、然れば後見人は、魔術
者の合圖の下に、連接桿をつけて、流通を全ふせしめ電氣作用で、葛籠
は柱脚に密接し、如何なる膂力ありと雖、持揚げることも能はざるべし、
又輕くせよとの合圖術者よりあらば、連接桿を放てば、電流全く絶え、
葛籠だけの重量ゆる輕々となるに依つて術者は指の力のみで揚るのであ
る

九 浮 れ 太 鼓

太鼓の内部に木槌即ち鼓槌の仕掛けありて、之を蓄電磁器に連接せしめ

太鼓を吊せる紐から天井裏に傳はり、天井には蓄電磁器あり、後見人は天井裏に、鼠の如くに、潜伏して、下なる術者の合圖に従ひ、電流の緩急をするが故に、鼓槌の動き方も亦た、緩急を生じ、太鼓の響が種々なる譯なり

一〇 變化の鐘

鐘は一見金屬製の如く見ゆるも、其實は、飴色玻璃にて製し、二筋の絹絲若くは毛絲にて製したる紐にて、舞臺の上に吊すこと、浮れ太鼓の如くなし、鐘を打つ槌は、頂蓋に固着すべし、此頂蓋は眞鍮製にて少許の

磁電を含ませ、又槌の柄は針金にて、保護物あるが爲めに、電流此針金に充分通ずれば、槌を動かすこと、凡て浮れ太鼓の理に同じ

一一 妖魔の聲

外題も説明も仰山らしくさもなく物凄いやうなれど、種を明かせば、眞くだらぬ理窟で決果り、浮れ太鼓、變化の鐘皆同一の原理から案出した妖魔の聲である

まづ卓の上の板を取り除け、此板を支ふる木框に一箇の孔を穿ち、その木框の二ヶ所に磁鐵を潜伏せしめ、孔の眞中なる處へ蹄鐵形の物を置き

其一端に真鍮製の發條を螺旋にて留め、又一方には電流保護物を固着するを要す、此發條は何等の効力なりやといふに、これは保護物を磁石の兩極より凡そ二分許の處に存せしむるにあり但し電氣が針金より、流通する時蹄鐵形が、磁石氣を受け、而して保護物は發條の之に抵抗するにも拘はらず、兩極に鋭く接觸し、斯くして再び流通を絶たれて復た以前

の位置に復するまで、接し居るなり、而して、金屬製の槌の如き物を、緊着するは、之れ物體を打撃するが爲めにして、保護物の下邊と兩腕形の端末即ち磁石の兩極の間の點との間に螺旋を着けるが故に、此の磁石に針金より電氣を通ずる時は、保護物は直に磁石の極に引かれ而して槌

は動くので即ち音響を發す

針金は奈落(舞臺下)に隠るゝ後見人は、術者の合圖に従ひて適宜に電氣を通はすので、其構造は電氣専門家に就て製造を依頼せよ

的世界手品と魔術終

214
808

大正三年六月一日印刷
大正三年六月五日發行

〔定價金十錢〕

不許
複製

東京市本所區元町六番地

編輯兼
發行者

高橋友太郎

印刷者

東京市神田區松住町五番地
菅井十一郎

印刷所

東京市神田區松住町五番地
礎文社

東京市日本橋區若松町四番地

發行所

電話浪花四八六二
振替東京一〇六八

春江堂書店

終

